

ラグビーの魅力・・・ラグビー校視察&ともだち作り

32回生 近藤 節夫

ラグビー……。何と心地良く魅力的な響きであろうか。ウィンター・スポーツの華、ラグビーこそが他のスポーツでは想像も出来ないほど、いわく言い難い魔力と奥深い魅力が秘されたスポーツであると近年とみに実感している。移り変わりの早い現代のビジネス社会でも、ラグビー特有の魅力と本質的に特異な個性面が様々な分野で発揮され評価されているのも頷ける。

週刊誌「AERA」(2015年6月1日発行)特集記事に「職場でもない、大学でもない、人と人とのつながりを生む『第3の場所』として機能するラグビー」と紹介され、「ラグビー人脈」がラグビー経験者を幅広い分野で活躍させていると大きく取り上げられたことは、格別目新しい発見というわけでもない。しかし、この記事にはラグビーには単なるスポーツの一面だけに留まらず、根源的に人を包み込み、能力を発揮させる本質的な胚芽があることを示唆していると受け取ることができる。

本稿では浅薄な経験ではあるが、ラグビーについてその魅力と忘れられない印象的な事例を取り上げてみたいと思う。

I. ラグビー校へのノスタルジア

ラグビー校の視察については、本誌創部55周年記念号ですでに紹介した。敢えて一部重複を承知のうえで、改めて懐かしいラグビー校視察を振り返ってみたい。

1982年10月、旧文部省教員海外派遣団にコーディネーターとしてイギリスの教育機関を訪れるチャンスが巡って来た。その当時鉄道会社から旅行会社へ移ってまもなく、一連の教員海外派遣事業に携わっていた私は、旧文部省からの要請によりある県の教育委員会を訪れ、早速訪問都市を決める打ち合わせに入った。研修先国はすでにイギリスに決まっていたので、取り敢えず教育研修都市としてイギリス国内のどこの都市を訪れるかということを早く決める必要があった。その訪問都市決定と詳しいスケジュール作成の前に、まず頭に浮かんだのは、イギリスを訪れる以上ラグビーのメッカであるラグビー市を何とか視察都市に組み入れてもらえないだろうかということだった。日本の教育関係者がイートン校、ハロウ校やウィンチエスター校などと並ぶイギリスのパブリック・スクールの名門『*The Nine*』のひとつ、ラグビー校を視察し、自らの目でありのままの実態を知ることが、必ずや視察する先生にとっても大きな教育的効果をもたらすものであると、教育委員会に対して数々あるメリットを挙げ、ラグビー市への視察を強く働きかけたのである。

名門ラグビー・パブリックスクールは、創立以来イギリス内外から多年に亘って得られた高い評価と、栄光に輝く傑出した卒業生等々、輝く伝統と実績を誇り、今日までイギリス教育界に多大な足跡を残し、教育界に大きな影響を与えてきた。そこでそのラグビー校を見学する具体的な理由とメリットを数多くリストアップし、ラグビー校の資料を添えて提案し、この機会にラグビー校を含むラグビー地区の他の学校、及び教育施設を訪



ラグビー・パブリックスクール Wikipedia より

問するよう熱く説いたのである。幸いにしてプロポーザルは県教育委員会によって受け入れてもらうことができ、ラグビー校視察が現実となった。

率直に言って、これは表面的にはともかく、私自身の永年に亘る個人的なラグビー校視察願望を絡めたラグビー市教育施設訪問でもあった。県教育委員会が私の提案を受け入れてくれることを知らされるや、「やったあ！」と小躍りして思わず笑顔がこぼれるのを抑えることができなかった。後は肝心要の視察先であるラ

グビー市教育委員会が、日本側の望む教員派遣団を要望通り受け入れてくれるかどうかには掛っていた。早速ラグビー市教育委員会に宛てて県の教員派遣団の受入れと施設見学をお願いの書状を郵送した。しばらくしてラグビー市教育委員長より県教員海外派遣団の視察と希望を全面的に受け入れたいと心温まる丁寧な返書を受け取った。かくして夢にまでみたラガ

ーマン憧れのラグビー校訪問が実現したのである。

イギリス中部のラグビー市は緑に囲まれた田園都市で、ラグビー発祥の地らしく各学校にはもちろん、市内のあちこちに見事な芝生に覆われた緑のラグビー場が数多く見受けられ、流石にラグビーのメッカであることを窺わせてくれる。

ラグビー・パブリックスクールは1567年にイングランド中部のバーミンガム市東南東45kmの地に裕福な子弟のための私立学校として開校された。この校庭でサッカーの試合に夢中になったウイリアム・ウェッブ・エリス少年が思わずボールを手に走り出したことから、今日のラグビー・フットボールが生まれ、ラグビーの歴史がスタートしたと伝説的に伝えられている。ラグビー校は過去に名宰相ネヴィル・チェンバレン、「不思議の国のアリス」の原作者ルイス・キャロル、戦時中のシンガポール陥落時のイギリス極東軍司令官として日本人にも馴染み深いアーサー・パーシヴァル將軍ら錚々たる人物を輩出している。彼らも当然このグラウンドでボールを追いかけて、ラグビーを楽しんだことは容易に想像できる。

ラグビー校の男性教師はほぼ全員がラグビー経験者で、彼らは湘南高ラグビー部で高々3年間の短い活動であつたにせよ、ラグビーをプレイしたというそのキャリアだけで私を同じラグーマン仲間として温かく接してくれ、心温まるもてなしと素晴らしい想い出を与えてくれた。ラグビーのメッカに滞在しているというだけの感激で、終始内から湧き上がってくる喜びと興奮が身体全体を熱くさせてくれた。生憎同行した教員の中にラグーマンがいなかったせいもあり、僭越ながら私の僅かなラグビー体験がラグビー市滞在中相互の親しみと全体のコミュニケーションを高めるうえで効果的な融和剤となってくれたものと思っている。ラグビー経験のない団

員らもラグビーの生みの親となったウェッブ・エリス少年の銅像を横目にグラウンド内を軽くジョギングして臨場感を感じ、本場イギリス・ラグビーの熱い魂とエネルギーのようなものを身体全体で感じ取っていた。

ラグビー地区のいくつかの学校視察を終えてラグビー市滞在最後の一日に、お世話になった市教育委員会委員長を始め、視察先の各学校長や教員、父兄ら教育関係者を、滞在していたホテル「スリー・ホースシューズ」にお招きして返礼レセプションを主宰した。宴たけなわとなるや、彼らは我々を輪の中に引き込み男女一緒になつて円陣を組み、意味不明のシュプレヒコールをくり替えてはぐるぐる回った。視察団の中で前記のように私だけがラグビー経験者だったというだけの理由で、図らずも「ラグビー特権」とも言つべき破格の厚遇を受けた。それは日本側の派遣団長を差し置くような形で、いつの間にかラグビー校関係者らによつて急務に設営された「特等席」に担ぎあげられ、居合わせたメッカのラグーマンから胴上げまでされ、兄弟分として過分な言葉を浴びせられ、すっかり好い気分浸らせてもらったことである。これには、団長を始め教員派遣団員もみな改めて本場のラグビー魂とその固い絆に驚きつつも、好意的に見守ってくれた。思い返せば、あれほど盛りあがった「宴会」は空前絶後だと言っても好い。

教員海外派遣団は帰国してからもラグビー市の先生方とのそれぞれ個人的な交流が続き、その後も毎年秋になると「ラグビー会」と名付けられた同窓会を開いていた。開会前にはその都度宿泊ホテル近くの空き地で全員がラグビーボールをパス回したり、キックしてたっぷり本場ラグビーの想い出と余韻に浸り、ラグビー校視察旅行を懐かしんでいたものである。それは団長が彼岸へ旅立つまで毎年続けられていた。

折に触れラグビー校訪問を思い出しは、ラグビーが育んでくれた人との絆を懐かしくも夢のようなメモリーとして夢見心地に浸っている。

Ⅱ. ラグビーはともだち作り

時間が限られた人生の中で私たちは生涯どれほど多くの親しい友だちを得ることが出来るだろうか。その交友関係の広さと深みが自らの人生をより楽しく、充実したものにさせてくれる。そして、そのことが幸せを大きく左右することにつながると言っても過言ではない。それほど生涯の友の存在が自分自身を成長させ、充実させ、助けてくれる。持つべき良き友、畏友が多ければ多いほど、人生においてかけがえのない宝物が増え、それは精神的に豊かなものとなる。ありきたりだが、老若男女を問わず、良き友は必ず人生の良薬となり糧となってくれる。友の存在がどれほど多難な世の中で生きて行くために心の支えとなり、大きな力となってくれるか計り知ることができない。その意味でラグビーほど良き友だち作りに寄与してくれるスポーツは他にはないのではないだろうか。

とは言いながら、現代社会では、残念ながら年々良き友だちに巡り合い、終生の友となる友だち作りに逆行的な事象や環境が増えているように思えて仕方がない。一人ひとりが親友と呼べる友を持つことが少なくなっているのではないだろうか。早期幼児教育、塾と受験勉強の弊害、IT産業の歪んだ一面の発達と携帯電話の普及、親子間の断絶、家内ひきこもり現象、少子化、地域コミュニケーションの希薄化、等々による子ども同士、或いは家族間の、ひいては地域の人びとの間の交流が大きく減じたことなどが、子どもたちが子どもとしての社会教育を受け、人間として成長する機会

を失わせているのである。とりわけ人と話す機会が大きく減じていることがそういう偏った社会現象を生んでいる。現代社会における「コミュニケーション」の不足が、直接向き合う対面交流ではなく、機械・器具による間接「コミュニケーション」に陥って、人間同志が正面から顔を合せて話し合い切磋琢磨するチャンスを失わせているのである。長い人生の延長線上で、一度は必ずやぶつかるであろう挫折に際して、心から相談に乗ってくれる友がいない、またはそういう親友が少ないという現実、その人が落ち込んだ奈落の底から這い上がろうとするチャンスを失わせているのではないだろうか。

例えば、いかに日常生活で役立ち便利で効果的なITソフトであろうとも、所詮は間接的会話であり、相手の表情や息遣い、臨場感、つまりその場の相手の腹の内まで知ろうとする気持ちや様子は微塵も伝わって来ない。

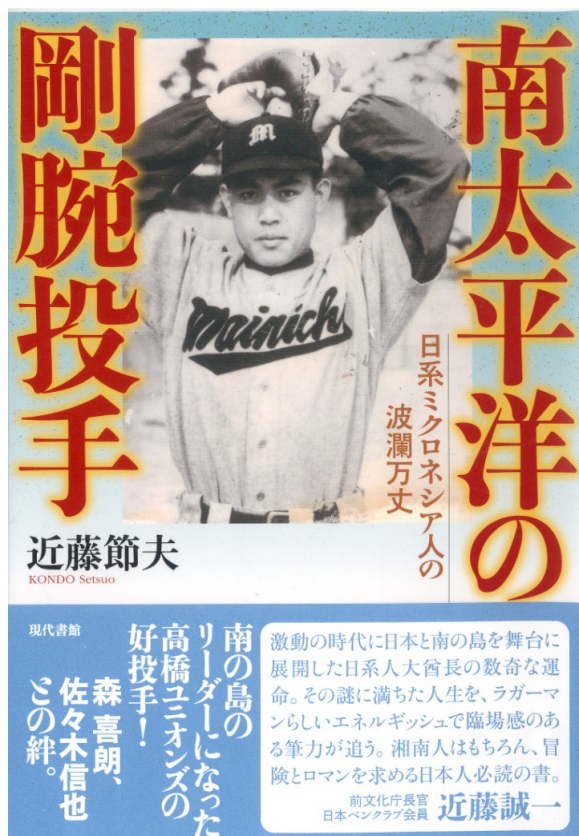
一方ラグビーは、普段激しく繰り返されるトレーニングはもちろん、実戦でひたむきに試みるチームメイトと意思を合わせたチームプレイの中で仲間意識は一層強められる。1チーム15人が結束して1つの目標に向かって邁進する《ONE FOR ALL, ALL FOR ONE》の精神と、お互いに顔を見合わせ常に仲間の意思を確認したうえでぶつける身体との融合は、遮二無二「前へ」「ゴールへ」と突き進むことによって閉塞感に活路を大きく開くことにつながる。

それは自分たちのチーム内のプレイという小さな出来事ばかりではなく、もっと広範にラグビーの存在、ラグビーの周囲への影響という観点からもラグビーならではのユニークで特徴的な現象がみられる。

僭越であるが卑近な一例を披露させてもらえるなら、2014年に上梓

したノンフィクション作品「南太平洋の剛腕投手」（「現代書館」刊行）でラグビーについて触れた。

ラグビーの森元総理と湘南高甲子園初優勝の佐々木信也氏も紹介



拙著では、終戦直後旧制湘南中学に在学？して、2リーグ制発足とともにプロ野球投手になり、その後戦前日本支配下にあった南洋群島のひとつ、旧トラック島（現ミクロネシア連邦チューク島）の大酋長となった実業家・故相澤進に、森喜朗・元内閣総理大臣、そして湘南高甲子園初優勝時の一年生選手でスポーツ・キャスター・佐々木信也氏を主たる登場人物として紹介している。その3人の中で周知の通り森元総理は現在日本ラグビー・フットボール協会会長であり、一時期早大ラグビー部に所属したラグーマンで

あるが、その父森茂喜氏は早大の名スタンドオフとして戦前のラグビー界にその名を鳴らし、早大卒業後は長年社会人ラグビーの強豪として知られた京都市役所の中心選手だった。父は戦時中陸軍大尉とし南方へ派遣され、相澤家のある旧トラック島で独立歩兵大隊長として軍務の傍ら、島民たちにラグビーを教えながら友だち作りをして多くの島民に慕われ、捕虜のイギリス兵チームとも親善試合をしては、敵味方の差別なく島を挙げてお互いにラグビーを思う存分楽しんだ。いうなれば、敵国兵とノーサイド精神を分かち合ったのである。

終戦となるや一転立場が代わり父は捕虜の身となって収監された。しかし、今度はイギリス軍がラグーマン森大尉らに敬意を払い日本人チームとラグビーを通して、終始互いにラグーマン魂を持ち続け、占領軍と敗戦国捕虜という敵しい対立関係を超えた友人同志として、普通なら厳しく辛い収容所生活を送る筈が島民も交えた自由で明るい捕虜生活を送ったという。父親が祖国日本へ送還された時には、親しかった島民らに混じってラグーマンの英軍兵士や、イギリス軍司令官までが記念のプレゼントを携えて親愛なる日本軍ラグーマンに別れを告げるためにわざわざ波止場へ見送りにやって来た。父親がラグビーのお陰で窮地にあつても生きる希望を失わず、どれほど生き甲斐を感じ、ラグビーから多くの宝物をもらったかとその効用について小さい時から随分体験談を聞かされ、それがラグビーへの愛情を強くかきたててくれたと森喜朗元総理は感慨深げにラグビーへの思いを話してくれた。

そして森元総理は父親と自分自身のラグビー体験から、『ONE FOR ALL, ALL FOR ONE』のラグビースピリッツこそが最もフィフティーンのチームワークと、一人ひとりの友だち作りに適し、向いているスポーツはほかには

ないのではないかと熱を込めて話され、私も心より共感を憶えている。

若い頃にラグビーに手を染めたことがあるかないかで、人生で得られる大きなメリットと、知らずに失っているデメリットに分かれると言っても過言ではないと思う。そのことは私自身のラグビー体験、ラグビー校で感じたこと、そして森元総理から伺った話を通して強く実感し、そういうチャンスに巡り会えたことを有り難く思い深く感謝している。

さあ！ 現役のラグーマンよ！ ラグビーをプレイするチャンスを得られることに今こそ幸せを感じ、感謝して、目の前のボールをキャッチし、ゴールへ向かって全速力で走り抜けようではないか。君の周囲には心温かいラグーマン仲間がいつも見守り支えてくれている。ラグビーの魅力を改めて認識し、ひたむきに前進しよう。そして、同時にもっと多くの人びとにラグビーの面白さや魅力をPRして、国民的スポーツとして広く啓蒙しようではないか。

ラグビースポーツで多くの友だち作りの絆を固め、多くの人びとと心を通わせ、幸せを感じさせ、世界へ目を開かせ、成長させてくれるかけがえのないスポーツである。二十一世紀の現代はひと時も気の許せない、張り詰めた空気が流れる複雑な時代と環境にあり、それだけに余計にそう思わずにはいられない。ラグビーが永遠に栄えることにより多くの友だちの輪づくりが大きく広がり、幸せを受け止め甘受することを切に願っている。ラグビーはこの世の得難い貴重な宝物である。